

Jane Eyre における子どものイメージ： その二面性について

石井明日香

はじめに

Charlotte Brontë の *Jane Eyre* (1847) には、“An Autobiography” という副題がついているが、特に Jane の子ども時代の不幸が強調されている。また、赤い部屋に閉じ込められた記憶など、子ども時代の経験が大人になってからの Jane に影響を与えていることが多い。Jane にとっては子ども時代が大切であることは間違いないであろう。しかし一方で自分以外の子どもを見る目は概して冷淡と言ってよい。特に教え子 Adele に対しては、Adele 個人が好きなのではなく、自分の教え子だから、教育を受けたからよくなったと思っているようであるし、その教育も自分で行ったのは途中までで、あとは寄宿学校に入れているのである。*Jane Eyre* における子ども時代への関心は、子ども一般というよりはむしろ自分の子ども時代への関心であると言える。こうしたことは語り手である Jane が教育を受けた大人であることと関係しているであろう。本論では *Jane Eyre* における子どもと教育の問題について論じたい。Jane の、自分以外の子どもに対する冷淡さにはさまざまな理由が考えられるが、特に Emily と Anne Brontë の作品における子どもの描き方と比較して考察する。Jane は子どもに対する教育の重要性を主張しつつも、教育を受けても変わらないものを自分が持っていたことを主張しているようだ。

子どものイメージ

冒頭で述べたように、*Jane Eyre* では子ども時代の不幸が強調されている。同じような状況のヒロインが Jane Austen の *Mansfield Park* (1813) にも描かれているが、複数の批評家が指摘するように、Fanny Price の場合にくらべて、Jane の不幸に対する同情を引き起こすような書き方がされているのが *Jane Eyre* の特徴であるといえる (Coveney 104)。これはもちろん Jeannette King が指摘するように、*Jane Eyre* が一人称で書かれていることと大いに関係している。この二つの作品は、小説の冒頭ではヒロインは十歳前後、物語が大きく展開するのはヒロイン十八歳前後、という点では共通するのであるが、*Mansfield Park* の場合は、Fanny が十歳前後で Bertram 家に引き取られた事情というのは、状況を説明するためには必要であるが、それ以上ではない。極端に言えば、十八歳になった Fanny が自分が引き取られた事情をまったく覚えていなくて、周囲の人から聞いて知っているだけであっても問題はないと言える。*Jane Eyre* では事情は異なっている。たとえば Gateshead での、特に赤い部屋に閉じ込められた体験は大人になってからの Jane に影響を与えている。子ども時代が Jane にとって大切なものであることは疑う余地がない。だからこそ、「十歳までの十年にほぼ十章分使った」という十一章冒頭の文章があるのである。

しかし一方で、Jane 以外の子どもの具体的な描写は内容の割には少ないと言える。Jane は Adele の governess として Thornfield に赴くが、具体的に勉強を教えている場面はほとんど描かれておらず、書いてあるのは Jane と Edward Rochester のことが中心である。同じように governess を描いた Anne Brontë の *Agnes Grey* (1847) と比較すれば違いは明らかである。後者においては、Agnes が教え子を相手に苦労して授業をする様子が具体的に描かれ、後に結婚する Edward Weston とのやりとりは小説の後半につつましく描かれるだけである。*Jane Eyre* では、Jane が Thornfield にいる間はもちろん、Ferndean で Rochester と、そして Adele とも再会した後も、Adele とのやりとりは、批判するために、あるいは後述するよ

うに都合のいいときにだけ描かれているだけで、最後に寄宿学校に送られて戻ってきたことが数行で述べられているだけである。¹ そもそも *Jane Eyre* において、子どもがよいイメージで現れることは少ないし、自分以外の子どもに関しては大変評価が厳しい。子どもが現れる *Jane* の夢は2回とも不吉な前兆であるし、Brontë の他の作品、たとえば *Villette* (1853) でも同様で、主人公 Lucy Snowe は夏休みの寄宿学校に、家族が連れて帰らない “a poor deformed and imbecile pupil, a sort of cretin” (227) と言われている子どもと取り残されて孤独に蝕まれ、病気になるのである。*Jane Eyre* も *Villette* もともに大人になった語り手が語る物語であることが関係しているかもしれない。

そして “I cannot live so [without love or kindness]” (68) という *Jane* の子ども時代の主張からすれば、母親に捨てられ、Rochester はまったく愛情を注がず、ただ高価なものを買って与えるだけという Adele の境遇にこそ同情すべきであり、これから述べるように決して Adele をかわいがっているとは思えない *Jane* になついている分、*Jane* の子ども時代よりいそう痛ましく思われるのであるが、*Jane* が Adele に向ける目は、教育を受けた大人が子どもを見る目であり、概してとても冷たい。*Jane* は始めから Adele に厳しく、最初の評価は、“She [Adele] had no great talents, no marked characters, no peculiar development of feeling or taste, which raises her an inch above ordinary level of childhood” (200) というものである。そして *Jane* が、“some little freedoms and trivialities into which she [Adele] was apt to stray when much noticed, and which betrayed in her superficiality of character, inherited probably from her mother, hardly congenial to an English mind” (176) というとき、Adele の好ましくない(と *Jane* が思っている)性質はフランス人の母親譲りであると *Jane* が思っていることは明らかである。つまり Gilbert と Gubar が考えるように (350)、フランス人の踊り子の私生児であるらしい Adele を、*Jane* が母親の罪を警告するものと考えていることでもあり、“Adele is not answer-

able for either her mother's faults or yours [Rochester]" (176) という Jane の言葉の信憑性が問題になるところでもあろう。

その上 Jane は都合のいいときだけ Adele を利用していると考えられる。一度目は Rochester と Milcote への買い物の際に Adele を同行させ、もう一度は Rochester との(中断した)結婚式の前夜に Adele の寝顔を見て過ごす。二度とも結婚への不安を Jane が感じたときに Adele が登場する、あるいは都合よく利用されるのである。また、小説の最後では先ほど触れたように Adele が寄宿学校に入れられたことが述べられるのであるが、その結果 “a sound English education correct in a great measure for her French defects; and when she left school, I found in her a pleasing and obliging companion” (475) と説明されている。Adele に矯正が必要であると考えている点で、そしてイギリスとフランスが対立概念のように表現されている点で、² “I [Rochester] e'en took the poor thing [Adele] out of the slime and mud of Paris, and transplanted it here, to grow up clean in the wholesome soil of an English country garden.” (176) という Rochester と同じ意見であるようだ。Jane の評価とは違って人なつっこい、かわいらしい子どもであった Adele が、Jane の好みに合うような、ある意味で不気味な子どもになったのは、再三述べているように、Jane が Adele を寄宿学校に入れたためであるが、そこは “a school conducted on a more indulgent system, and near enough to permit of my visiting her often, and bringing her home sometimes” (475) と述べられている。前の学校より規則がゆるやかで、Ferndean に近くしばしば訪ねることができ、ときどきは連れ帰ることもできる、つまり Jane の影響がおよびやすい環境に Adele を置いた結果の Adele の変化なのである。特に Ferndean は人里離れた森の中で、ともに暮らすのは体の不自由な夫と二人の使用人のみ、ということであれば、Jane のすることに反対する人間がいるはずもない。こうして Jane は、孤児であったものが、いまや一家の主人としておさまり、その家の子どもを思い通りに支配するのである。

この筋書きは Emily Brontë の *Wuthering Heights* と比較できるであろう。孤児として Earnshaw 家に引き取られた Heathcliff は、最後には Earnshaw 家のと Linton 家の子ども、Hareton と Catherine を支配している。ただこの二人は支配されつつも完全に Heathcliff の思い通りにはならないのであるが、*Jane Eyre* の場合は先に引用したように Adele は完全に Jane の思い通りになっているので、Jane の完全な勝利である。Heathcliff が自分や他人の子どもに対して行ったのは、ときに肉体的暴力を含む虐待であったが、Jane による Adele への虐待は、より巧妙で上品な虐待である。ついでに言うておけば、上で述べたような、結末での Jane と Rochester 二人きりの、他人の入る余地のない愛の形は *Wuthering Heights* における Catherine と Heathcliff の愛の形と比較しうるのである。

さらに Jane は一度は Thornfield を去っていて、Adele に対していわば無断の職場放棄を行っているのであるが、それでも Adele は Jane になついている。こうした自分にない人なつつこさにたいするコンプレックスが、Adele に対する Jane の冷たさの原因かもしれない。子どものころの Jane が打ち解けない、人なつつこいところのない子どもであったことは、Jane のお婆の Mrs. Reed や Gateshead の使用人 Bessie の言葉からうかがえるが、大人になってからもこうした人なつつこさが気に入らないらしいことは、Rosamond Oliver への態度からもうかがえる。いとこの St. John Rivers の恋人で、美人で性格もよいこの女性への Jane の評価があまり高くないのは、Jane の引き出しをかき回すといった Rosamond の人なつつこさが原因かもしれない。

そしてもうひとつ、Adele に関して言えば、Jane の冷たさは母親である Celine への嫉妬であるとも考えられる。Adele の父親については明確にされていないが、Celine は Rochester の子どもであると主張している (176)。Rochester は自分の子どもではないと言っているし、Jane も、Rochester と似たところはないと言い切っているが (176)、Rochester と Celine が恋人同士であったことは間違いなく、Adele を見た Jane が Celine

に対する嫉妬を感じたと考えるのは不自然ではないだろう。そして Jane は最後には Adele に対して “a pleasing and obliging companion” (475) と言っていて、これは先ほど述べたように Jane の矯正の結果であるのだが、それだけではないかもしれない。つまりいまや Rochester の子どもを生んだ Jane は、Celine に対する嫉妬を感じることなく Adele をほめているとも考えられる。

こうして Jane の子どもに対する態度は意外な自信のなさを示しているとも言える。再び *Agnes Grey* との比較を試みたい。Agnes と教え子 Rosalie Murray との関係は、Jane と Adele の関係に相当するが、Weston をはさんで一時は三角関係になることから、Jane と Miss Ingram との関係でもある。しかし Jane の Miss Ingram に対する態度は “Miss Ingram was a mark beneath jealousy” (215) と傲慢ですらあるが、Agnes は Rosalie の美しさは素直に認め、また Rosalie の不幸な結婚生活を見て誠実なアドバイスを送るなど、総じて忍耐強く優しい態度で Rosalie に接している。Jane の Miss Ingram に対する態度は、いくら否定されても、嫉妬からくるのではないかという疑いは完全に晴れることはないが、Adele への冷淡さがその母親への嫉妬と Adele へのコンプレックスからくるのではないかと思えることは前述のとおりであるが、これにくらべて、おとなしい Agnes の Rosalie に対する寛容さと忍耐力の裏には、自分に対する揺るぎない自信があると考えられる。

教育について

先に引用した小説最後での Adele に対する評価は、言うまでもなく教育の重要性を Jane が信じているということでもある。さらに Jane が、Thornfield を飛び出したあとでたどり着いた Moor House の使用人について、“Prejudice . . . are most difficult to eradicate from the people whose soil has never been loosened or fertilized by education” (367) というとき、これもまた教育の重要性を強調していると考えられる。そして Jane は

教育を受ける機会がないのは同情するが、自分で教育を受ける努力をしなかったからではなく、ただ教育を受ける機会がなかったというだけで批判の対象としているのであって、教育を受ける機会は平等であるべきだという考えはここには見られない。教育を受け(られ)なかった人間への差別をより感じる言葉である。ここで思い出されるのは、*Jane Eyre* の語り手は大人になっている、教育を受けた Jane であるということである。Jane が教育を受けたために、受けなかった人間への偏見を持つようになったとすれば皮肉である。

もともと Jane は知的好奇心の旺盛な子どもで、Lowood 時代に学友 Helen Burns や校長の Miss Temple に惹かれたのは、特に彼女たちの知性に対してであった。Jane が驚嘆したのは、“how many they have read! What stores of knowledge they possessed! They seemed so familiar with French names and French authors” ということであつたし、それに続けて “my [Jane] amazement reached its climax when Miss Temple asked Helen if she sometimes snatched a moment to recall the Latin her father had taught her, and, taking a book from a shelf, bade her read and construe a page of Virgil; and Helen obeyed” (105) と述べている。³ また、Jane が Moor House に近づいていったのは、Diana と Mary の Rivers 姉妹が知らない言葉(ドイツ語だとあとでわかったのであるが)で本を読む声に引き寄せられたからであった。また Lowood を半ば告発するように書いているのは環境は待遇に対してであって、教育内容自体はかなり満足できるものであり、概して高水準のものであつたらしいことは、Jane の外見に関しては、昔と変わらず美しくないと率直な言い方をする Bessie が、Jane の絵やピアノはほめていることからもうかがえる (123)。⁴ その他に Jane はネイティブのフランス語のも理解でき (123)、刺繍もできる (123) ということで、governess になるのに必要な教育を受けた結果、Lowood の教師だったときよりも二倍の給料で Adele の governess として雇われることになった。そして教育を受けた結果、「少なくとも表面では妥協すること

を学んだ」と言われている (Gilbert and Gubar 347)。確かに Jane は Miss Temple や Helen からある程度感情を抑えることを学んだと言えるし、その結果、Reed 家のいとこたちや Miss Ingram のことを本当は嫌いでも、Bessie や、Thornfield の家政婦 Mrs. Fairfax の前ではほめるなど、考えていることと違うことを言えるようになっている。

同時に Jane は、教育を受けても変わらないものを持っている。Jane が子ども時代に持っていたものは、大人になってからも変わらずに小説を支配しているのである。たとえば Helen に「人間の愛を大切にすぎる」と言われたあとでも、Rochester への愛を告白することをやめない点などは “I cannot live so [without love or kindness]” (68) と叫んだ子ども時代のままであるし、子ども時代の想像力が大人になってからも否定されていない。Jane は子ども時代に読書によって想像力を刺激された。*Gulliver's Travels* や、*History of British Birds* を読んで想像力をめぐらすことが不幸な子ども時代の楽しみであった。長じてからも、Rochester との最初の出会いのときに、彼の乗った馬の足音を聞いて Bessie のおとぎ話の中の、犬や馬の形をした妖精の Gytrash を思い浮かべている。つまり、子ども時代の想像力が大人になってからも失われていないし、小説全体でも合理主義で説明できない子ども時代の想像力が否定されない世界があることは、小説の最後で超自然的な体験、つまり St. John Rivers からの求婚を受けようとした瞬間に、Rochester の声が聞こえたということが起こることからでもわかる。そして *Jane Eyre* における子ども時代への関心が、子ども一般への関心ではなく、現在の自分を形成したものとしての子ども時代への関心であると読めるのは今まで見てきた中でも明らかであろう。この点 “An Autobiography” という副題にふさわしい。Jane は自己主張の強い人間で、今まで見てきたように教育を受けなかった人間に対する優越感を隠そうともせず、同時に Miss Ingram に対し、“Miss Ingram was a mark beneath jealousy” (215) といっていることでわかるように、身分の高い人間のことも批判している。自分以外の人に対する攻撃的とも言える率直過ぎる批

判は、一人称の語り手の信頼性ともかかわってくるであろう。Katheleen Tillotson の意見では、Jane は self-critical であり、一人称の語り手の持つ問題点を十分に克服しているということであるが (295)、Jane の信頼性は議論の余地があるであろう。

おわりに

以上見てきたように、*Jane Eyre* における子どもや教育の描き方は、一見相反する二面性を持つといえる。その点で本論で十分論ずる余裕はなかったが、女性の自立に関する問題と同様であり、また大人になってからの一人称の語り手の信頼性ともかかわる大きな問題である。Jane の子ども時代への関心は自分自身への関心ということに集約できるのであるが、自分自身への関心が子ども時代への関心につながるということは、教育を受けても変わらない本質的なものが自分の子ども時代に形成されているということでもある。Jane の本質的なものとはたとえば想像力のようなものであり、それが小説全体を支配している。同時に Jane は、自分以外の子どもに対しては、自分で気づいている以上に冷淡でもある。こうして *Jane Eyre* は、Jane の意図したことではなかったが、教育と子どものイメージに関して二面性を持った、ある意味で現代的な小説となっている。

註

- 1 結末での Jane の Adele に対する冷たさに関しては King にも詳しい。
- 2 このテーマに関しては Duthie に詳しい。
- 3 女性の古典語への関心は特別な意味をもっている。「古典語の教育は男と女の知的分割線だった。…意欲を持ったヒロインが、古典の習得を真理探究の第一段階の目的にするというのが、ありふれた題材である。」(Showalter 35) というのである。
- 4 しかしピアノに関してはあまりうまくないと Rochester は言っている (155–56)。

引用文献

Austen, Jane. *Mansfield Park*. Ed. Kathryn Sutherland. Harmondsworth: Penguin, 1996.

- Brontë, Anne. *Agnes Grey*. Ed. Angeline Goreau. Penguin, 1985.
- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. Ed. Q. D. Leavis. Harmondsworth: Penguin, 1985.
- . *Villette*. Ed. Mark Lily. Harmondsworth: Penguin, 1985.
- Brontë, Emily. *Wuthering Heights*. Ed. David Daches. Harmondsworth: Penguin, 1985.
- Coveney, Peter. 江河徹監訳『子どものイメージ』東京: 紀伊国屋書店, 1979.
- Duthie, Enid. *The Foreign Vision of Charlotte Brontë*. London: Macmillan, 1975.
- Gilbert, Sandra and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic. The Women Written and Nineteenth-Century Literary Imagination*. New Haven, Yale UP, 1984.
- King Jeannette. *Jane Eyre*. Open Guide to Literature Milton Keynes: Open UP, 1986.
- Showalter, Elaine. 川本静子他訳『女性自身の文学』東京: みすず書房, 1993.
- Tillotson, Kathleen. *Novels of the Eighteen-Forties*. London: Oxford UP, 1961.